



発行／青森県立自然ふれあいセンター 〒038-1301 青森県青森市浪岡大字大釈迦字沢内沢1-1
 TEL 0172-62-4527 FAX 0172-62-8510 URL <http://www.jomon.ne.jp/~bonjyu/> メールアドレス bonjyu@jomon.ne.jp

□ 行事レポート □

●センター開設記念行事 半沢・藤曲トレッキング 7月5日(日)



藤曲を経由して半沢コースを歩きました。起伏が少なく、歩きやすいトレッキングでした。

●夏休みクラフト体験 7月18日(土)～8月19日(水)



トチの実やクルミ、木の枝などを使って自由に作品作りをしました。

●少年自然探検隊(夏) 7月26日(日)

例年では二日間で行いますが縮小して一日で行い、自然観察などを楽しみました。



●コンパスと地図で歩く梵珠山 8月23日(日)

午前中は座学でコンパスの基本を学び、午後は使い方の解説を交えて屋外での実地をしました。



●初秋の三山巡り 9月6日(日)



釈迦堂山、梵珠山へ登り、松倉神社と三宝の松を経由して鐘撞堂山を巡りました。

●梵珠作品展 9月10日(木)～10月11日(日)



自然に関する作品展。写真を中心に、工作、植物画など様々な作品の展示をしています。

● ヤブコウジ

齋藤 信夫 (青森自然誌研究会)

ヤブコウジは暖かい地方に多い植物である。だから、植物を求めて青森県内の山野を歩き始めた頃に、海拔400～500mのブナ林の下生えとしてヤブコウジが生育している事実を知ったときは、少々驚いたものである。神社の境内や里山などの人間くさい場所では群生する場合もあるが、前記のような山岳域の森林では通常散発的に出現する。梵珠山にしても、たとえば南寺屋敷広場近くの登山道沿いにひょっこり顔を出す、まるで目立たない。それは、ヤブコウジ自体が背丈20cmほどで、他の植物に覆われた場所だけで生育するという、きわめて遠慮がちな生き方を選んでいるからでもある。そんなことから、日光が直接当たるような場所では日焼けを起こし、あるものはそのうちに枯れたりする。

ヤブコウジの花は7～8月頃にひっそりと咲く。茎は枝分かれをしないでまっすぐ伸び、葉は茎の先端に多く、花は葉の下でうつむいて咲く。だから、直径7mmほどの白い花は葉に隠れて咲くことになり、注意深く見ないと、花を見逃してしまうことが多くなってしまふ。花が終わったヤブコウジには直径5～6mmほどの球状の果実が形成されるが、その場面に遭遇できるチャンスはそれほどなく、これまでの経験では、明らかに花

柄と思われる先に果実を確認することは少なかった。果実が少なければ種子も少ない。それではどうやって仲間を増やしているかが気になるけれど、ヤブコウジは匍匐枝を伸ばして新しい個体を生じさせるのだという。

果実は10月頃から赤くなる。冬が近づくとつれ、常緑の葉の間に、小さな赤い果実をつけるという生態が、多くの人々を惹きつけたのが、ヤブコウジは昔から園芸植物としてもてはやされてきたという。園芸本では、18世紀に園芸植物として栽培されはじめたと紹介されている。赤い果実もいいが、葉に斑が入ったり、葉形に変化があったりと、当時は様々なタイプのヤブコウジが見いだされ、珍重されたのが理由だという。冬場、常緑で赤い実をつけるセンリョウ、マンリョウが新年を飾る植物として愛でられる場合と同じように、ヤブコウジは手塩にかけて育て続ける鉢植えや盆栽向きの植物として好まれたようだ。

園芸植物扱いだったヤブコウジは山橘（やまたちばな）として万葉集にも詠まれているというから、人間との関わりが結構深かった植物といえそうだ。私は栽培が苦手なので、やはり、屋外でヤブコウジに出会う瞬間が好きである。



ヤブコウジの蕾 (2019年7月29日)



ヤブコウジの果実 (2019年9月30日) まだ赤くなっていない。

生物こよみ (昨年)		10月										☀️☁️☔️ : 昨年の天気		℃ : 昨年の気温 (月最高気温)		低 : 昨年の気温 (月最低気温)																
日	曜	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
観察できたもの		キクガシラコウモリ	カワガラス	コゲラ	クサギ実	オオアオイトトンボ	クリ実・ハナイグチ	ヒガラ	ヒガラ	シジュウカラ・コゲラ	クサギカメムシ	ノコンギク花・ゴマナ花	アキノキリンソウ花	アオゲラ	シジュウカラ・コゲラ	ヒガラ	コゲラ	ダイコンソウ花	カシラダカ・アオジ	ゴマナ花	タチアザミ花	オオルリボシヤンマ	キクイタタキ	アオゲラ	スコットカメムシ	オオアオイトトンボ	ウマオイ	コゲラ	ウソ	ルリヒタキ・コゲラ	コゲラ	シジュウカラ
天		☀️	☀️	☁️	☔️	☁️	☀️	☁️	☔️	☁️	☀️	☀️	☔️	☀️	☀️	☀️	☁️	☀️	☀️	☔️	☀️	☀️	☁️	☀️	☀️	☁️	☔️	☔️	☀️	☀️	☀️	☁️
℃		25	26	22	24	20	18	19	19	17	21	22	17	18	20	13	15	15	15	14	18	19	17	19	19	16	17	15	15	17	14	18
低		13	13	14	17	14	8	8	12	8	8	12	14	7	7	4	4	4	3	9	8	8	11	9	9	10	12	5	4	4	8	6

● 梵珠の昆虫「アカタテハ」(タテハチョウ科)

鳴海 富美子(津軽昆虫同好会)

翅に鮮やかなオレンジ色の帯が入るタテハチョウで、前翅の先の方は黒褐色に白い斑点が付き、後翅の縁もオレンジ色の部分がある。

雑木林の周辺等でよく見かけるが、普通に見られ、決して珍しいチョウではない。

7月の暑い日、林道を歩いていて日陰で休んでいたら、前方の松の大木に鮮やかなチョウが止まっていた。アカタテハである。やがて飛び去ったが、しばらくするとまた戻ってきて同じ場所に止る。これを何度か繰り返して去っていった。歩いていると昆虫(とは限らないが)の思いがけない行動に出会うことがある。

11月上旬の晴れて暖かい日、開けておいた家の窓に1頭のアカタテハが入っていた。翌日は寒かったせいか窓ガラスに止ったまま動かない。暖かくなると飛び回っているが、どうやらここで越冬するようだったが、下に紙袋を置いてあげたら、翌日中に入っ

ていた。春になっても出て来る気配がないので出して見たら乾燥して死んでいた。置いた場所が悪くてかわいそうなことをしてしまった。

梵珠でもあちこちで目にするチョウだが、サワグルミ登山口の小屋の前に、日が差している暖かい日等、他のチョウと混ざって止ったり飛び回っていたりするのを目にすることがある。

10月中旬、寺屋敷付近で新鮮な個体を数頭見かけ、他の場所でも多くの個体が群れて地面に止ったりしているのを見かけたが、何頭も群れているのはあまり見かけない。

成虫越冬で、他のチョウでは春先翅が破損したりしているのが見られることが多いが、このチョウはきれいなまま見られることが多い。

食草はアカソやエゾイラクサ等であり、樹液や花のどちらにも来、また地面に止っているのもよく目にする。



アカタテハ 大館沢 2014.7.1



アカタテハ 梵珠 2016.9.24

生物こよみ(昨年)		11月											☀️☁️☔️☂️: 昨年の天気		℃: 昨年の気温(月最高気温)		低: 昨年の気温(月最低気温)													
日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
曜	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
観察できたもの	ハギマシコ	アカゲラ	ニホンカモンシカ	カケス	エナガ・ゴジュウカラ	デン	ヤマガラ・アカゲラ・ヒヨドリ	エナガ	デン	ヒヨドリ	シジュウカラ	ミソサザイ	シータテハ	ゴジュウカラ	ヤマガラ	コゲラ	ミソサザイ・ホンドタヌキ	エナガ・ヒガラ	コガラ	コゲラ・デン	ミソサザイ	ヒヨドリ	ゴジュウカラ	カヤクグリ・ツルリンドウ実	カケス	エナガ群れ	ゴジュウカラ	ヒヨドリ・ゴジュウカラ	マヒワ群れ・オオアカゲラ	ヒガラ・アオゲラ
天	☀️	☀️	☔️	☀️	☁️	☁️	☁️	☁️	☀️	☁️	☀️	☀️	☀️	☁️	☁️	☁️	☀️	☀️	☁️	☁️	☁️	☁️	☀️	☔️	☁️	☁️	☀️	☁️	☁️	☁️
℃	14	15	13	12	12	10	13	9	8	9	15	12	15	13	6	6	5	10	7	1	4	8	13	19	15	4	10	1	2	1
低	7	7	2	2	1	5	2	4	4	0	1	3	1	0	0	3	-2	-2	0	-3	-2	-2	0	4	0	-3	-3	-3	-3	-4

●スエヒロタケは二重ヒダ 湯口 竹幸（青森県きのこ会）

スエヒロタケはごく普通に見られるありふれたきのこで、肉が強靱で通常は食用とはならない。柄はなく、サイズは3センチ以下で直接枯れ木に付いており、白色腐朽菌である。長梅雨の今年は発生が盛んで、家庭菜園に使用しているメダケにさえ発生していた。傘表面は白～灰褐色で粗い毛に覆われ、傘の縁は円形から手のひら状となり雪男の手のような。最大の特徴はヒダが2重に見えることで、これは独立した子実層が並んで連なり、偽ヒダといわれるが、2重のヒダ状に見える。色は白～灰色、または灰褐色～薄い鮭肉色。乾燥するとこの2重構造は閉じて1重に見えるが、水を含ませると元に戻る。一科一属一種であり、旧ヒダナシタケ目からハラタケ目へ移動されている。英語名は「2重ヒダ」もしくは、「離れたヒダ」の名がついて、最大の特徴をそのままきのこ名にしている。中国では「裂褶菌」という。やはり英名と同じでヒダが裂けているという意味であり面白い。日本では「褶」の文字は着物の合わせ、または折り目の意味で使われているが、中国ではキノコの襲には褶の文字を使う。本菌は食用と評価されている。タイでも食用で日本でも一部の地区で食しているらしい。ちなみに中国ではカビとキノコの両者

を分けずに「真菌」というので、きのこ図鑑は「真菌図鑑」である。日本ならば真菌図鑑は水虫や病原性のカビの医療系の図鑑であろう。

和名はヒダが縁に広がっているのも末広がり、スエヒロタケというありがたい名がつけられている。主に広葉樹の枯れ木や、シイタケなどの栽培樹木を害し、時には針葉樹にも発生する。自然界ばかりでなく、公園や遊歩道の用材、家屋の構造材にも発生する厄介な存在だが、更に厄介なのは人への感染である。真菌症は体表性では水虫が代表であるが、体内では空中を漂う胞子が呼吸器へ入り、そこで増殖した場合難治性の呼吸器疾患となる。千葉大学に国内唯一真菌医学専門外来があり、アレルギー性真菌性喘息（季節性が多い）では30例以上の報告がある。肺炎の様だが、薬剤が効かない症例に交じているのかもしれないという話があり、高齢化や免疫抑制剤の使用増加により本菌由来などの真菌症は増加傾向にある。ただし恐れる必要はなく、日和見感染であり、健常者では問題ない。ヒト以外にも、犬や水族館で死亡したアザラシの肺から見つかって話題となった。本菌からはシゾフィランという制癌剤が分離されたが、2011年以来使用されていない。



スエヒロタケ



スエヒロタケ偽ヒダ

生物ごよみ (昨年)		12月												☀️☁️☔️: 昨年の天気		℃: 昨年の気温 (月最高気温)		低: 昨年の気温 (月最低気温)															
日	曜	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
観察できたもの		ミソサザイ・エナガ	カケス	カワガラス	ヒレンジャク	コゲラ	アカゲラ	コゲラ	シジュウカラ	アカゲラ	ミソサザイ	ニホンカモシカ足跡	ニホンカモシカ	ミソサザイ	シジュウカラ	ミソサザイ・カワガラス	ホンドタヌキ	ホンドリス足跡	コゲラ・ノウサギ足跡	ニホンザル足跡	ホンドキツネ足跡	ニホンカモシカ	アカゲラ・ミソサザイ	ホンドキツネ	エナガ・シジュウカラ	ノウサギ	ゴジュウカラ・カワガラス	アオゲラ	※年末休館日				
天		☔️	☀️	☀️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️	☔️		
℃		2	6	10	15	9	3	5	-3	-3	-1	1	2	1	-1	-1	3	6	1	3	3	2	1	2	1	3	4	-3	-4	-4	-2	0	
低		-1	-1	-1	3	0	-1	-3	-4	-5	-5	-4	-3	-3	-4	-4	-1	0	0	-1	0	5	6	5	-2	-1	-3	-6	-7	-6	-5	-2	